



新版横溝正史全集 2
白蠟变化

講談社

新版 横溝正史全集 2

白蠟変化

昭和五十年六月二十二日 第一刷発行

著者 横溝正史

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社 (企)

東京都文京区音羽二―十二―二十一

郵便番号 一―二―一

電話 東京(〇三)九四五―一―一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

半七写真印刷工業株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はお取りかえ致します。

©横溝正史 1975

Printed in Japan

目次

白蠟変化

3

双生児

107

丹夫人の化粧台

123

面影双紙

139

鬼火

153

蔵の中

205

かいやぐら物語

227

貝殻館綺譚

239

蠟人

257

面（マスク）

283

舌

295

解説 中島河太郎

299

装丁 宮田雅之

白蠟變化

百万長者の死刑囚

晴れるともなく、曇るともなく暮れてゆく物うい春のたそがれ。その静けさをかき消すように、突如躍り出した号外の鈴の音が、街中をひとときの興奮の中へまきこんだ。

号外の鈴というものは、どんな際でも人の心を不安にするものである。ましてやとかくの噂のたえぬきょうこのごろ、又かと、人々が胆を冷すのも無理ではない。たちまち街のあちこちにはり出された号外の前には黒山のような人だかり。幸いそれは人々が懸念したような記事ではなかったが、その代り素晴らしい話題らしい話題を街中にまきちらした。

「ははあ、やはり死刑に決まりましたな」

「止むを得ずまいね。遺口がひどうございましてからな。後が悪うございましたよ。屍体の始末をつけようとしたのがね」

「そうそう、殺人なら殺人で、潔よく自首でもすれば格別、屍体を刻んで焼却しようとしたのは、ひどうございましてからな」

などと同情のあるような、ないような口物を弄している連中があるかと思うと、

「ざまア見やがれ、こういう有閑不良の徒はどしどし死刑にしてやるのが国家のためだ」

などと、ひとり力んでいる慷慨家もある。

さらにまた別の場所では、小生意気な女学生が二、三人、号外に出ている写真を指しながら、

「ちよいと、この人なかなか好い男じゃない？」

「そうね、フィリップ・ホームズに似ているわ。虚弱そうな魅力が——」

「ほんと。そういえばこの事件はフィリップ・ホームズの役どころかも知れないわ。古い老舗の血統の犠牲になったところなんか」

彼女たちの眼から見ればこの恐ろしい現実の悲劇も、映画とかわりないらしいのである。

さて、人々をこのように興奮させた号外というのは、一体どのような記事であったか。その表題だけでもここに紹介することしよう。

細君殺しの百万長者

遂に上告を棄却さる

一審通り死刑と決定

そしてそこには問題の死刑囚日本橋の大老舗、べに屋の主人諸井慎介の写真が、大きく掲げられているのである。なるほど女学生の批評に間違いはなかった。三十前後の

色の白い、老舗の主というよりはどっちかといえは芸術家タイプの、まずは美男子の部に入るべき青年である。この男が遠からず絞首台の餌食になるのかと思うと、痛々しい気がせぬでもない。どう見ても、これが屍体寸断という惨劇を演つてのけた兇悪な犯人とはうけとり難いのである。

この諸井慎介の細君殺害事件ほど、ちかごろ世間を騒がした事件はなかった。この事件の顛末については、いづれ後で詳しく述べなければならぬが、さしあたって我々はいま、この号外によつて惹起された、次のような情景を覗いてみることも無駄ではなからうと思う。

号外のまきちらした興奮がまだ巷の隅々から消えやらぬ燈ともし頃、牛込から四谷塩町に向けて疾走している一台の自動車があった。バックカードの素晴らしい自家用である。乗っているのは四十前後の、狐のような感じのする一紳士。背が高く、痩せぎすの体を、身に合つた黒ずくめの洋服でピツタリと包んでいるから、一層ひよろ高く見えるのである。顔は飽みてそつたように、細く、鋭く、骨ばつていて、鼻がまた気味悪いほど高い。おまけに眼が釣上り気味なので、誰が見てもまず第一に連想するのは狐という感じである。

この自動車の内部には、医学博士、鴨打俊輝と、御丁寧に肩書まで入れた名札が掲げてあるが、この狐面の紳士がその鴨打医学博士なのである。

ところでこの鴨打俊輝という名だが、どこかで聞いたことがあると思つたのも道理、先に述べた諸井慎介の事件の

際、証人としてしばしば法廷にも呼び出され、新聞にも引合に出されたのがこの人である。新聞の報道にして誤りがなければ、この人は諸井慎介の従兄に当る筈である。

それにしてはこの人の今の態度は不可解である。従兄が死刑と決定したというのに、少しも悲しそうな色は見えない。いや寧ろ得意そうな色さえ見える。ひょっとするとこの人は、まだあの号外を見ていないのではなからうか。

いやいやそんな筈はない。さつきから彼が、膝の上に披ひげたり畳んだりしているのは、確かにあの号外だ。自動車に乗つた時から彼は、繰り返し繰り返しそれを読んでいる。

しかもその読方というのが尋常ではない。例えば文学青年がはじめて自分の名が、活字となつたのを発見したときのような、あるいは又、味わつても味わつても味わいきれぬ美味に舌鼓を打つときのような、なんとも形容出来ぬほどの愉悅に面を輝かせながら、繰り返し、繰り返し読み返しているのだ。

従兄が死刑と決まつたのがこれほど嬉しいとは、この人はよほど變つた人に違いない。

しかし自動車が塩町に近くなるに従つて、博士の表情は次第にあらたまつてきた。

自動車は間もなく、塩町のとある閑静な横町の、小ぢんまりとした邸宅の前でとまつた。博士は自らドアをひらいて自動車からおりた。

そして見事な檜の一枚板で出来た門をくぐり、上品な植込みを左右に睨みながら、掃除の行きとどいた石登いしあがりをふ

み、磨きのかかった細目格子の玄関にたつて呼鈴を押すころまでには鴨打博士の面からは、あの炎えあがるような愉快のいろは綺麗に拭い去られて、その後を占領しているのは、いかにも鹿爪らしい憂愁の表情。

この人は役者のように巧みに表情を変える術を知っていると見える。

博士は玄関のわきにかかっている表札の面を斜に覗みながら、二度三度、重ねて呼鈴を押した。その表札には、

六条月代

と艶かしい女名前。

狐と美女

鴨打博士が玄関の呼鈴を押す少し前ごろから、この邸宅の奥まった一室では、若い女がひとりよよとはかりに泣きくずれていた。

十二畳じきの京都風な日本座敷。床の間が思いきつて大きく、書院窓があつて庇が深く、その庇のすぐ外に楓の若葉が鬱陶しいほど茂っているから、まだ燈をともさぬ座敷のなかは陰気なほど暗い、この寒々とした空気のなかに、女の泣声がいつまでもいつまでも続いている。その女のすぐ側にあるのは例の号外である。して見るとこの女もやはり、あの死刑囚、諸井慎介と関係があると見える。

女の泣声はおよそ小半時も続いたろう。泣くだけ泣くといくらか気が軽くなったと見えて、間もなく彼女は泣きぬ

れた面をあげたが、その顔を見るとちよつとびっくりする程の美人である。

年齢は二十三か四というところだろう。同じ美人といつても旧い型のなよなよとした美しさではなくて、この人は、実に堂々とした美しさだ。体なども日本人には珍らしいほど豊かで、その肉づきの艶かしさ。大きい、くっきりとした眼鼻立ちの艶かさ、そして変化にとんだ双眸にやどした情の深さ。もしこの女が現在のように憂いに沈んでいるのでなかったら、その美しさはさらに百倍したであらう。

これが有名な女流声楽家の六条月代。そして月代もまた、あの日本橋の老舗べに屋の親戚筋にあたるのである。

月代はもう泣いていなかった。彼女は机のそばに膝行りよるとそこに立ってかけてあつた、額入りの写真を手にとりあげた。写真の主はいうまでもなく死刑囚諸井慎介である。その美しい面を上げしげとうち見やっているうちに、月代の顔にはちよつと人を驚かせるほどの、激しい決心の表情がうかんで来た。

「慎介さん、まだまだ絶望しちゃいけません。あたしがきつと、きつと救つて見せます」

彼女は低声にそう呟いたが、すぐ事の困難さに気がついたのか、パツパツと音をさせてその写真を伏せると、ふたたびよよとばかりにそこに泣き伏した。

全く月代が絶望するのも無理ではなかった。法律によつて既に死刑と確定した者を、どうして彼女のような繊弱い女の力で救い出すことが出来よう。もし月代が真実、慎介

を救おうと思つているとしたらそれこそ、正気の沙汰とは思えない。

小間使が鴨打博士の来訪を通じたのはちょうどこの時であつた。

「お嬢さま、鴨打先生がお見えになりました」

月代はこの家の女主人だけれど、未婚だからお嬢さまといわれるのになんの不思議もないのである。鴨打ときくと、今まで泣き伏していた月代は、まるで毛虫にでも刺されたようにビクリと体を起した。

「まあ厭な、選りに選つてこんな時に——」

と、いかにも嫌悪にたえぬという風に眉をひそめ思わずそう口走つたが、じき思い直したように、

「そう、仕方がないわ。応接間へ通しておいて頂戴な」

と溜息まじりにいった。

鴨打博士も月代の遠縁にあつていた。しかしどういふものか月代はこの人を虫が好かぬのだ。相手は神楽坂辺に堂々たる病院を経営しており、博士という肩書まで持った立派な紳士である。数多い親戚のなかでも、この人ほど世間から尊敬を受けている人は少い。それにもかかわらず月代は、この独身の医学博士がなんとなく底気味が悪いのだつた。

しばらく応接間に待たされた鴨打博士は、やがて現われた月代の姿を見ると、あまりの美しさに思わず眼をそばだてた。さぞや悲しみに沈んでいるだろうと思つたのに、案外それでもなさそうにみえる。それだけでも博士の氣に入

つたのに、黒地に金と銀で舞扇と鼓をえがいた、大胆なお召の衣裳が、柄の大きな容貌によく似合つて、いつも洋装ばかり見慣れている博士の眼には、一入ひとしほの美しさ、ただもうゾクゾクするばかりの好もしさなのだ。

「よくいらっしやいました。どうぞお掛けあそばせ」

「いや、今日はあまりよくは来ないのです。さきほどの号外を見ましたか」

「はい、見ました」

「なんともお気の毒でした」

「致しかたございませんわ。それもこれも犯した罪の報いなんですもの」

「どうか私を忘れていたなどと思わないで下さいよ、これも随分骨を折つて奔走したのです。あなたにいわれるまでもなく、慎介君は僕にとつても親戚にあたるのですからね。金で出来ることなら殆んどすべてのことをしました。あらゆるつてを求めて運動もしました。だから結局駄目であつたからといって、私を怠慢であつたなどと仰有られると困りますよ」

「よく分つております。あなたは随分お骨折りに下さいました」

月代は呟くようにそういったが、その調子には言葉の意味とは全く違つた皮肉な響きがこもつていた。しかし鴨打博士はさすがにそこまで気がつかず、

「いや、あなたにそう仰有つて戴けば私もこれで骨折りがあつたというものです。それに、今日はさぞ落胆して

いられるだろうと思つたのに、それでもなさそうなのでたいへん安心しましたよ」

ああ、この男にどうして、自分のこの例えようもない悲しみが分るものか！ 月代は一言、相手を思い知らせるような言葉を吐いてやりたかつたが、すぐ思い返したように、

「いえ、もうとっくから覚悟していたものですから。——それにあなたが御覧になるよりは、内心悲しんでいるのかも知れませんよ。ほほほほほほ、何んですか、さっきから頭がチクチクしてたまりませんの」

これは態のいい撃退の言葉である。鴨打博士はそれをさるとじき立ち上つた。何も急ぐこととはないのだ、恋敵の諸井慎介が死刑になつてしまえば、後はゆるゆるといくらでも方法がある。

「それじゃ今日はこれで失礼しましょう。取り敢えず御報告かたがたお見舞いにあがつたのですから、後のことはいずれ又ゆっくり、御相談することにしましょう」

「はい、何分よろしくお願ひいたします」

鴨打博士が気味悪い北叟^{ホシ}笑みをうかべながら帰つたあと、月代はもう一度ひた泣きに泣いた。涙も涸れんばかりに泣いた。こういう際には泣くに限る。なまなか耐えていると益々苦痛がつるばかりである。

月代は泣くだけ泣くと気が軽くなつた。時計を見ると既に七時を過ぎてゐる。そこで思い出したように彼女は女中を呼んだ。

「あたし今夜は御飯いただきませんから」

それからその後へもう一言付加えた。

「明日の朝まであたしひとりでいたい。誰が来ても留守だといって。寝室のドアは内部から鍵をかけておくから邪魔をしないでね。何も心配するようなことは決してないよ」

主人の悲歎を知っている女中が委細かしこまって退ると、月代は寝室と化粧室の二間つづきになった洋風の部屋へ退つて、内部からピンと錠をおろしてしまつた。

一時間ほど経つた。

と突然、庭に面した寝室の窓がスルスルと内部からひらいて、そこからソツと忍び出したのは、たつた今、あしたの朝までひとりで居たいといつたあの月代ではないか。さつきとは違つて地味な洋装に外套の襟を立て、ロシヤ女のように黒い肩掛を頭からかぶり、おまけにロイド眼鏡までかけてゐる。

そういう姿で彼女は、闇にまぎれてこっそりと裏木戸から外へ忍び出たのである。

深夜の尾行

裏路づたいに入口をきけて、自宅からはるか離れた電車通へ、月代の姿が現われたのはそれから間もなくのことだつた。

通りすがりの円タクを呼びとめて銀座まで走らせたが、

何を思ったのかそこで又別の自動車を拾うと、こんどは浅草まで。——一体これはどういうわけだろう。浅草へ行くのなら最初からそうすればいいのに、随分むだなことをするものだと思っていると、彼女はさらに浅草で別の自動車を拾って牛込まで。

どうやら行先を眩まそうというのが彼女の肚らしいが、このように用心に用心を重ねて一体どこへゆくつもりだろう。自動車は間もなく牛込へついた。若松町付近の淋しい横町で自動車をとめると、彼女はすばやく路上に飛びおりた。

時刻は九時すぎ。この辺の九時といえば真夜中も同然だから、どの家も表を閉じて寝静まっている。真暗な夜道を時々生ぬるい風がなで下ろす。明日は雨になるのかも知れぬ。

月代は暫く小刻みに足を急がせていたが、そのうちに何に気付いたのか、ハッとしたように歩調を緩めた。

誰か尾行して来るものがある。

まさか——と一度は強く打消したがやはりそうらしい。

こちらが足を早めれば後の足音も早くなる。こちらが歩調を緩めると、うしろの足音もゆっくりと遠のいて行く——この夜更に一体誰だろう。女と見ての悪戯だろうか。それならいいのだが、もし自分の目的を知っているの尾行だとしたら！

月代はゾツとしたように眉をすばめた。

いまさら逃げ出すわけにもゆかぬ。そんな事をすればい

よいよ動きがとれなくなるばかりだ。いっそ後戻りして相手の正体を見究めてやるるか。だが、その勇氣も出ない。

とつおいつ思案している折柄、道はしだいに下り坂となって、行手に黒いお社の杜が現われた。坂道はそこでくの字なりに曲っているので、誰でもそこまで来ると、お社の境内を斜につっ切つて近道をする。月代はこのお社のそば迄来たとき急に決心が定まった。彼女はいきなり境内へとび込むと、拜殿のうしろにある崖を、ひと息で駆けのぼり、真暗な樹立のなかに身を隠したのだ。と、間髪を入れず尾行者の影が現われた。洋服を着た背の高い男だ。急ぎあして境内を斜に突切り坂下の方へ姿を消したが、じきに、うろろうと辺を見廻しながら引返して来た。

この時彼は非常なへまを演じたのである。ついうっかりと常夜燈の下を通りすぎたものだから、今迄闇に包まれていた容貌が、あからさまに、その光の中に浮きあがったのだ。月代はその顔を見た刹那、ジーンと体中の血が一時に凍ってしまう程の大きな驚きにうたれた。尾行者は鴨打博士だったのだ！

前にもいった通り月代はこの人が嫌いだ。しかしそれには別にこれという理由もなく、唯なんとなく虫が好かぬという程度に過ぎなかったが、今こそ彼女は、この博士の憎むべき、非常に大きな理由を発見したのだ。

人間という奴はときどき思いがけない所で、心中の秘密を暴露するものだが、この時の鴨打博士がそれだった。ああ、常夜燈の光に照らし出された博士の顔の、なんとという

陰險で腹黒かったことか！

おそらく彼は四谷からズツと月代の後を尾行して来たのだろうが、して見ると月代があれ程用心に用心を重ねた行動も、狐のような狡猾な博士を欺くことは出来なかったと見える。

博士は暫く未練らしく、その辺をうろろろしていたが、とうとう思いきったように舌打ちをすると立去って行った。

月代はじつとその足音に耳を澄していたが、なかなか隠れ場所から這い出そうとする模様はなかった。およそ一時間ぐらいも、彼女はそこでじつと辛抱していたろうか、あの狡猾な博士の事だから、立去ったと見せて、その実まだその辺に隠れていないものでもない。

しかしそういう様子もない。博士はほんとうに諦めて帰ったらしい、月代はやつと安心して隠れ場所からはい出した。

それから間もなく彼女が姿を現わしたのは、刑務所の塀外だった。一体彼女はどこへ行くつもりだろう。この刑務所のなかには現在彼女の恋人が、囚われの身となっているのだが、まさかそれに会いに行くわけでもあるまいに——。果して彼女はあの黒い塀の下を通りすぎた。と行手に現われたのは空地と窪地の中間に、一軒ポツンと離れて建っている二階建。

門をくぐるとお粗末な格子のはまった玄関、月代はその格子戸を軽く叩きながら、

「開けて——開けて。——」
と怯えたような声で訪うた。

報酬五万円

「どうしたのです。尾行でもされたのですか」

転げ込むようにして入って来た月代を見ると、玄関を開いた男はびっくりしたように眼を瞠みはった。薄ぎたない、人相のよくない男だ。

「ええ、悪い奴に尾けられて。——うまく撒いたつもりだけど、石黒さんいて？」

「いますよ。まあ奥へお通りなさい」

男は用心深く表を見廻してから玄関をしめ、さき立って奥の唐紙をひらいた。それはどの借家にもあるような普通の八畳座敷。床には夜店ものらしい掛軸がかかっている、そのまえには竹筒の花活ななびに白百合が一輪。座敷の中央にはかりんの机、かたわらの瀬戸の火鉢には鉄瓶がシャンシャン湯気を立てている。見たところ、極くありきたりの光景だったが、実はこの平凡なたたずまいの蔭に、世にも驚くべき秘密がかくされていたのだ。

「石黒さん呼びますか」

「ええ、呼んで頂戴」

月代がそういうと、男は床の間のそばへ膝行いざぎりよって、白百合の花をぬくと、竹筒の花活に口をあてて低いこえでいった。

「石黒さん、六条さんが見えになりました」

それから彼は座敷の中央にあった机と火鉢をかたづけると、その下の畳を無造作にまくりあげた。そうしておいて、彼は無言のまま表の部屋へ出ていった。

間もなく、どこからか低い足音がひびいて来た。と思うと、今めくりあげた畳の下からふいにむっくりと男の頭が持ちあがった。光線よけの青い眼鏡をかけた、三十五、六の、色の黒い、遅しい男である。ジロリと月代の姿に流眊ながしめをくると、

「やっぱりやって来ましたな」

と、にこりともせず、太いブッキラ棒な調子でいいながら、畳の上へはい出して来た。作業服についた砂がザラザラとこぼれる。船員あがりとも見える、粗野な、しかしその粗野の中の一種の頼もしさを包んだような男だ。

「御免なさい。あなたの方から指図があるまでは絶対に来まいと思っていたのですけれど、あまり心配だったものだから——」

「いや、今夜あたり来るだろうと思ってましたよ。あんな号外が出た以上ね」

「あなたも御覧になって？」

「見ました、なんともお気の毒でしたね」

「いえ、あのことはもう仕様がないうわ。諦めているわ。だけどあちらがあんなった以上、何んとしてもこちらの方で成功して戴かなくちゃと思って——」

「大丈夫、私にまかせておきなさい。死刑を宣告されたか

らって、すぐ執行されるわけじゃありませんからね。相当時日がありますから、それまでにこちらの方は十分間にあいます」

「だけど、後どのくらいあったらいいの」

「そうですね。本当のところあと一週間もあれば十分ですが、あなたがまた気を揉むといけなから十日といっておきましょう」

「十日？ 間違いはなくって？」

「大丈夫です。十日の後には慎介君はあなたの胸に抱かれていますよ」

「まあ」

月代は心もとなさそうに、泣き笑いに似た微笑をうかべた。それからおすおすと相手の気をかねるように、

「ねえ、あたしあなたを疑うわけじゃないけれど、一度その工事の進行状態というのを見たいのよ。いけません？」

「そうですか。お安い御用です。しかし相当勇気が要りますよ」

「ええ、大抵の事なら大丈夫よ、あの冷たい監獄のなかで、死より他に考えることのないあの人のことを思えば——」

「そうですか」

石黒は苦笑をうかべながら、

「よろしい、それじゃ御案内しましょう」

「ああ、ちょっと待って」

月代は手にしていた鞆をひらくと、それを石黒のほうへ

押しやって、

「ここに約束の五万円があります。これは成功した時にお渡しする約束でしたけれど、ごたごたするといけませんから、今お渡ししておきます」

「そうですね。その方が私も好都合です。これが成功すると我々はその夜のうちに、外国へ逃げるつもりですから、遠慮なくいただいております」

「皆さん、外国へいらっしゃいますの」

「どうせついでです。皆つれて行きましょう。私が睨んでいる間はいいが、眼を離すとどんな事でまたあなたに御迷惑をかけるかも知れないような連中ばかりですからね」

「ほんとうにこんな恐ろしい仕事をさせて、何んといってお詫びしていいか分りませんわ」

「そんなことはないのです。男という奴はね、美しい女の欣ぶことなら、どんなことでもしたくなるのですよ。それに五万円なんて金は、そう容易く我々の手に入る金ではありませんんからね」

石黒は物凄しい微笑をうかべながら、無造作に紙幣束をポケットにねじこむと、

「さあ、御案内しましょう」
と、懐中電燈を手にとりなおした。

笑う地下道

月代が見たいといい、石黒が案内しようというのは、さ

っきの男が這いだして来た、あの畳の下であるらしかった。

覗いてみると、何んということだ、そこには直径六尺ばかりの深い縦孔がうがたれているではないか。そしてその暗黒の底からは、生ぬるい風が吹きあげて来て、そこにかかっている繩梯子をかすかにゆすぶっている。

「さあ、気をつけていらっしゃいよ。随分でこぼこの道ですからね。銀座の舗道を散歩するようなわけにはいきませんよ」

石黒は冗談まじりにそんなことをいいながら、自ら先に立ってその孔の中に潜りこんだ。

「ええ」

月代は肩をすばめてかすかに身願いをしたが、すぐ思い直したように男の後に続く。

危い、グラグラとする繩梯子だった。それを五、六間もおりたかと思うと、月代の足は漸く柔かい泥の上にふれた。

「さあ、これからが横孔だが、狭いから気をつけて。——
うっかりすると頭をうちますよ」

その注意が終るか終らぬうちに、月代はゴツンと頭を固い天井にぶっつけて、いまにも泣きだしそうな悲鳴をあげた。

「ほら、御覧なさい。立ってちゃ無理だ。恰好が悪くても仕方がない。我慢して四つん這いになるんですな。誰も見てやしないから大丈夫です」

實際、後から考えて、よくあんな真似が出来たと思うほどだが、彼女はその時躊躇なく、まっくらな地下道で四つん這いになった。

「いいですか。それじゃ私が行く通りついて来るんですよ。何も危険なことはないのだから大丈夫です」

それから後しばらく、二人は黙々としてこの奈落のような舗道の闇のなかを突き進んでいった。

後に事件が公けになって、その筋の人々によってこの舗道が検分されたことがあったが、その時、一人として、舌を捲いて驚嘆せぬ者はなかったという話だ。むろんこの舗道は決して完全なものとはいえない。今にも地層が陥落しそうだったり、あちこちに土崩れがあったりして、随分危うかしいものには違いなかったが、それでも絶対秘密のうちにこれだけの工事が進められたというのは、実に驚くべき事実だったのである。しかしそれは後のお話。

「あっ！」

と、ふいにくらやみの底から月代が低い叫び声をあげた。

「どうかしましたか」

「なんだか冷たいものが背中へ落ちて——」

といかにも気味の悪そうな声だ。

「なんだ。水ですよ。このうえはちょうど泥濘になってるんですからな。はははははは！」

石黒は面白そうに声をだして笑ったが、するとその笑い声が終るか終らないうちに、あちらからもこちらからも

はははははと気の抜けた笑い声がおこった。その声の気味悪さ。月代は思わず前にいる石黒にしがみついた。

「まあ！ あれは何？」

「え？ 何んですか？」

「今向うの方で誰か笑ったのじゃない？」

「ああ、あれですか。あれは反響ですよ。ほら、ほら、もう一度笑って見ましょうか。ははははは！」

石黒がわざと声を出して笑うと、くらやみの中から、ふたたび無気味な笑い声が、あちらこちらから合唱した。

「まあ随分気味が悪いのね」

「これは舗道の角度と空気の加減で起るのでしょうね。反響は六カ所で起るのですよ。ほら、聴いて御覧なさい。月代さん！」

と最後の一句に力を入れていうと、あちらの隅、こちらの角から、

月代さん！

月代さん！

月代さん！

月代さん！

月代さん！

月代さん！

とたしかに六遍、どんよりとした空気の中に旋回しながら、しだいに遠くなって行ったかと思うとやがて陰々として、底知れぬ闇のなかへ消えていった。

「止して！ 止して！」

月代はあまりの恐ろしき、気味悪さに思わず両手で耳を押えながら、

「なんてまあ気味の悪い！」

と呟いた。

まったくこれが恋しい人のためできえなかつたら、彼女はそのまま逃げ出したかも知れないのだ。

しかし、それから後には別に変ったこともなかった。ふたたび黙々として闇のなかを這い進んでゆくと、やがて向うのほうからボツと白い虹のような光がさして来た。その光を目標に最後のカーブを曲ると、突然そこには一種異様な光景が現われたのである。

数本の円筒がまるで火箭のように、強烈な白光を吐きだしている。その光によって、この恐ろしい洞窟内は、屋よりももっともつと明るいのだ。そしてそれらの光の中に、屈強の男が三人、青眼鏡をかけて、黙々として土を突き崩している。それが石黒の部下なのだ。彼等は石黒の後について入って来た月代の姿を見ると、驚いたように手を止めてこちらを振りかえった。

「おい、誰かこの方に眼鏡を貸してあげろ」

石黒が命令すると一番近くにあった男が即座に青い眼鏡を外した。

「さあ、これをお掛けなさい。この光はとても眼に悪いのですからね」

月代はその眼鏡をかけると、はじめて怯えたような眼であたりを見廻しながら、

「ねえ、これはもうどの辺になりますの。刑務所の下あたりになりますの」

「そうですわね。そこに刑務所の見取図がありますが、その上に、印しがついているでしょう。それがいま我々のいる地点です。そして慎介君のいる独房というのはいまここですか、ほら、あと極くわずかの距離しかないでしょう」

「まあ、そうすると私たちとあの人の間には、いま数間の距離しかありませんのね」

月代は深い感動にゆすぶられたようにさういうと、しばらく無言のまま佇んでいたが、やがて熱い涙がとめどなく、あの青眼鏡の下から流れおちてきた。そして世にも悲しげな歎歎の声うげなこゑが、しずかに洞窟のなかにひろがって行ったのである。

ああ、この時もし彼女が、この無鉄砲な、気狂いじみた計画が、どんなに思いがけない、さらにまた、この物語の表題にしめされた白蠟変化ろうろうへんげというのが、どのように恐ろしい怪物であるかを知っていたら！

べに屋一族

さて、ここで一応、諸井慎介の細君殺害事件の顛末なるものを、紹介しておく必要があるようだ。

日本橋通三丁目にあるべに屋小間物店というのは、江戸時代からの連綿たる暖簾のれんを誇る古い老舗である。やり方が地味なので世間的には目立たないが、何んと言っても近頃